

---

# REALITY

むう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

REALITY

### 【Z-コード】

Z5304Q

### 【作者名】

むう

### 【あらすじ】

眞実とは・・・。

### 友情?

### 恋愛? それとも恋?

色々な試練に立ち向かい、乗り越える

高校生のお話。

## 別れ

私の名前は 笠田 夢羽。

広島に住んでいながら岡山の高校に通う高校1年生。  
なんで岡山の学校に通つてるかつて？

それは色々な理由がある。

一つ目は地元の友達と上手くいかなくなつたこと。  
二つ目は高校からは誰も知らないところでやり直したかつたこと。  
おもにこの二つが理由になる・・・かな？w

「おお！ おはよ^ ^」

今日も通学電車で友達と待ち合わせ^ ^  
海野 友姫は耳からイヤホンを取ると  
ポケツトにしまい、私の横に立つた。

「おはよ^ ^」

挨拶を交わして私の恋バナで盛り上がる  
「ねえねえ、聞いてよおー！」

龍と連絡とれないのお・・・。

「まじでえ？ キツイなあ・・・^ ^・」

龍とは、私の彼氏で神奈川に住んでいる。  
清野 龍。

龍は26歳で私と10歳もはれている。  
元ホストで、今はネット関係の仕事をしている。  
複雑な話、龍には2つ下の彼女がいて、  
いわゆる二股をしているのだ。  
その彼女の名前は有紗。

2人は5年も付き合ってきて今は同棲中のこと・・・。  
私と龍との出会いはネット・・・。

今時なにも珍しくない。

「そろそろお別れかな・・・。」

「大丈夫だよ。だつて夢羽ちゃん頑張ってるじゃん。  
頑張つてるだけじゃダメなんだよ・・・。」

「意外に現実的w

「現実見なきやつ」

## ガラー

電車のドアが開いて柴田 春<sup>しばた はる</sup>が乗つてきた。

「あ！w」

「現実見てない人が！！w」

「え？春？夢羽ひどくね？ww」

「よし！別れる！」

「ええー？」

「なぜに？急に？」

「だつて・・・。夢羽のこと好きじゃなさそだもん^\_^」

「そつか・・・」

3人で学校に向かつた。

1時間目は理科。

はあ・・・。

テンション上がらない^\_^;w

よしw

自分の気持ちでも整理しますか！w

---

大好きなんだけど、この頃龍の何を  
信じていいのか分からなくなっちゃった。  
このまま、待つても同じような気がする。

広島に来る前に別れたほうがいいと思つ。

なんやかんや言って有紗ちゃんのこと

好きなんでしょう？

有紗ちゃんの話する時の龍すりごく楽しそう。

それに、有紗ちゃんには勝てないやへへ；

ずっと一緒にたんだからいいんじゃない？

本当はやだけど夢羽と付き合つてる時、

他の人おもわれる嫌だから・・・。

夢羽、どんなに短くてもいいから

連絡ほしかつた。

仕事忙しいのも分かつてゐる

無理ゆつてゐるのも分かつてわがままつてゆつのも

わかってるけど、やっぱ子供だから・・・。

夢羽のゆつてほしい」と言つてくれると、

本当に大好き？

でも、龍はそうじやなさや。

自分勝手だけど、被害妄想つてゆつて思つた

そう思われてもいいや。

どんどん夢羽の中で龍が大きくなるの。

そのたびにいなくなつたらどうしよう・・・。ってなる。

だからさ、有紗ちゃんを幸せにしてあげなよ。

もう他人の人好きになつちゃだめだぞ！

好きなのにさよならるのは嫌だけど、

夢羽なりに考えた結果だから。

どうせ、龍「別れよう」つてゆつても止めないでしょ？

夢羽ね、髪の毛切つたんだよ。

ショートのボブにしたんだへへ

龍、可愛いつてゆつてくれたよね

ちゃんと龍の事忘れないように切つたんだぞ（笑）

夢羽なりのけじめ

またどこかでばったり会ったときばかり、笑って話せるといいねー^-^

幸せな4ヶ月をどうもありがとうございました。  
すっごく幸せだった。

次はその幸せを有紗ちゃんにね^-^  
さよなら 馬鹿龍

---

気持ちをまとめたメールを友姫に見せると  
「夢羽ちゃん・・・泣きそう」  
つてゆつてた。  
これでいいんだ。  
そう自分に言い聞かせるように  
メールを送信した。

## 支え

携帯の着信がなる・・・。

ディスプレイには龍の名前。

いつもみたいに[冗談言つてくれるのかな?  
それとも、本当にお別れ?

携帯を開く手が止まる・・・。

今までの出来事が頭の中をよぎる。

初めて話をした日。

付き合おつって言われたこと。  
好きな音楽が一緒だつたこと。  
2人だけの秘密。

いっぽいいっぽい想い出があつて  
本当はまだ好きで・・・でも、このままじゃダメで・・・  
自分の意見がまともないなか、  
携帯を開いた。

---

俺は、夢羽のこと本当に好きだった。  
でも、やっぱ有紗と別れることは

出来ない。

自分から出でてゐるのに、『めんな・・・。

なんで？

そんなの勝手わざいぬよ・・・。

私の頑張りは全部無駄なの？

なんの意味もなかつたの？

そう考へると涙がでてきた。

好きなのに一緒にいれないつておかしいよ・・・。

携帯がなつた。

相手は保育園から仲のいい幼馴染の

甲田 利緒からメールだつた。

利緒つてゆつても男の子だけどね

w

夢羽う〜

元氣かあ？

なんてタイミングいいんだろう。  
どつかで見てるのかな？ w

元氣じやないよお^ ^;  
別れちゃつた・・・。

まじか・・・

俺は、夢羽が今まで頑張ってるの  
知ってるからそれが報われなくて  
悲しいなあ・・・。

夢羽のことだから泣いてるんだろう?  
お前が泣いてると俺まで悲しくなるから  
泣くな。

夢羽みたいに思ってくれる子は  
そんなにいないから俺は龍が  
うらやましいよ。

龍はもつたいいな。

俺が付き合いたいくらいだwww

いつつも利緒は優しいなあ・・・。

利緒の言葉で涙がでるよ。

ありがとお

小さい頃からずっと利緒に  
たよつてゐるなあへへ;  
私もしつかりしなくすりやなあ・・・

## 裏切り

人に裏切られることは慣れていればずだった。  
友達からも彼氏からも・・・。

だって、中学の時からそつだつたから・・・。  
小さい頃から自分の意見をはつきりと言つ子だった。  
悪いことは悪いと・・・言えれば良いと思っていた。

中学3年の時、それはなんの前触れもなくやつてきた。

「奈々つてうざくない??」

始まつた。女子の会話。このゆうつ会話が苦手だつた。  
自分より弱いものを見つけて、自分がのし上がる。  
そんな考え方が嫌いだつた。

自分の気に入らないことがあれば悪口をゆいつ。  
正直めんどくさかつた。

「ねえ、そう思わない? 夢羽」

「えつ? あつ・・・・。夢羽は何も思わないかな。」  
あたりさわるのないことを言つて、

どちらともに付かず、どちらからも好かれたかつた。  
コレが本音だと思う。

私が一番最低だ・・・。

奈々とは川田 奈々(かわだ なな)。

可愛くて人懐っこくて、男の子にもモテるような  
タイプの女の子。人のことを悪く言わないから  
私は好きだつた。少し憧れ? もあつたw

そんな奈々が悪く言われだした理由・・・。

それは・・・

奈々は1人の時間が好きな子だった。

別に嫌われるからとゆう理由でもなく、人に気を使うのが嫌だったからだと思う。

でも、女子は楽しくないのに一緒に笑つたりトイレに行つたり・・・流行に敏感で話が合わないと少し変な目でみられる。

これに合わせるのがしんどくなつたんだと思う。だんだんとグループから孤立するようになつた。ノリが悪いからとゆうそんな些細なことだつた。

奈々が1人でいるのはおかしい！

そう思つた私は、奈々に声をかけた。

「おはよ^ ^」

「夢羽・・・。うちなんかまわんでいいのに」

「なんで？夢羽は奈々と話したいから来ただけだしW」

「W。ありがと」

それから私は奈々と一緒に行動するよつになつた。

毎日どちらかの家で遊んだり、授業中に手紙交換したり・・・だんだんと仲良くなり、奈々が心を開いてくれはじめていた。

その頃、私と奈々のいたグループではターゲットが奈々から私にかわり、孤立させよつと考えていた。

私はきっと大丈夫。

何を根拠にそんなことを考えたんだろう・・・。

私はだんだんとクラスから孤立するよつになつた。

でも、奈々は違う。

私のそばからいなくならない。

そう信じてたのに・・・

今までのことは何もなかつたかのように  
前のグループに戻つていき、

まるで私なんか空氣のようにあつかわれた。

悲しくてしんどくてつらい時、

いつも変わらず助けてくれるのは

その時に付き合つていた岡本おかもと

健太けんただつた。

健太とは中2になつてから付き合い始めた。

健太からの片思いから始まり、周りからのフォローもあり  
今にあたる。

健太は明るくて気さくで誰とでも仲のいい  
クラスの中心人物のような存在だつた。

どんなときでもそばで励ましてくれていた。

「健太・・・。1人になっちゃつた・・・。」

きつと期待していたんだろう。

健太ならいつものように「大丈夫！俺がいるからっ。」

「口つと笑つて言つてくれると・・・

「もおさあ終わりにしねえ？」

「・・・・・えつ・・?」

「お前といるせいで俺まで孤立してきたわ。」

「・・・『めん・・・。私・・』

「もおお前の話なんて聞いてられんわ。

今こいつやって一緒にいるのも今日で最後だから。」

「つづう・・・うう・・・」

別れは突然だつた。

健太は私の前から消えていった

次の日から私の孤立はエスカレートしていた。  
それは・・・あのクラスの中心人物

健太のせいだつた。

ありもしない私のうわさを流し、  
みんなはいつも私のそばにいた

健太の言うことを信じ、どんどんと離れていく・・・

辛い日々が続いた。

友達も大切な人も一気になくなってしまった  
なにもやる気がおきず、食欲もなく  
食べては吐いての繰り返しだつた。  
でも、親になんて言えるわけもなく  
保健室に通うようになつた。

中3とゆうこともあつて、受験で塾に通つていた。  
そこでも、学校のうわさが流れ私の席が  
みんなの荷物置きにされたり、大きな声で悪口をゆわれたり・・・  
だんだんと塾にもいかず、外で時間をつぶして  
帰る日々が続いた。

それからとゆうもの、人からどう思われているか  
過剰に反応するようになり、人に合わせることで  
安心感をもとめて自分を守つてきた。

1人になることが怖かつたから・・・

だから、私のことを知らないところでやり直すために岡山の学校に通っているのだ。

もちろん、今までのこと全て親に言えるわけもなく「友達いっぽいで毎日たのしいよ」と明かるい子を演じてきた。

だって、心配かけたくないから自分の子供が嫌われるって思われたくないから

高校生になつた私は今、たくさんの友達に囲まれている。クラスで副委員長をやつて結構充実した毎日を送っている。そこには今までの私はいない。  
でも、たまに楽しくないのに笑つたり、人にあわせてしまつくながでてしまう・・・。  
そんな自分が嫌になる。

今までの全てを受け入れてくれたのが龍だつた。  
そんな大きな存在をなくした今、頑張れるはずもなく前にもどりつつあった・・・。

助けて・・・  
たすけて・・・  
タスケテ・・・

「おっはよ^ ^

電車、途中まで一緒にしょ?

一緒にいこ^ ^」

「あ・・・。う、うん^ ^」

私は声をかけたのは、保育園からの友達。  
野崎 倖香。

彼女とは家も近く今でも仲のいい私の唯一  
親友と呼べる人だ。

倖香とは学校が違うがたまに  
こうやって一緒に電車であう。

「夢羽・・・。少しば元氣でたあ?

カラ元氣してない?」

「ん・・・。ちょっとだけ? W

「私さあ、夢羽に紹介したい人がいるんだ。」

「誰?」

「いや、別に付き合うとかじゃなくて、  
ちょっとといいかな? つて私が夢羽に  
オススメする人なんだけど・・・。」

「あ・・・。メールするくらいなら・・・^ ^・」

「おつけー!」

そう言つて倖香は私の携帯にメールを送つた。

「これにメールすればいいの？」

「そそっ wんじゃ 私、おりるね^ ^

帰りにまたメールするから一緒に帰ろひつむ？」

「うん^ ^」

どうじよ・・・

送ったほうがいいの・・・・かな？

はじめまして夢羽です。  
倖香から聞きました。

よろしく(・・・)

メールを送り終わると、電車は最寄の駅に付いていた。

## 謎の男

おお？

本当にメールきたつ  
むつちや嬉しい^ ^

いつも偉香から夢羽ちゃんの

話聞ってるよ

俺の名前は田村 結時

よひじくねえ^ ^

うわあ・・・

正直軽そうな男の子だと思った。  
女の子に慣れてるとゆーか・・・^ ^ ; w

まあ、メールするくらいなら  
いいかな？

そななんだw

私の何をゆつてるのかは  
知らないけどね^ ^ ; w

「夢――――――」

後ろを振り返ると春がいた。

「もおー・夢だけで呼ばんでもよお  
「へへ もだつて呼びやすいもん」

春は2次元にびつぱりつかつている。  
どつぱりね も

本を読んでは「〇〇くんのキャラこいつー」

つてゆつてる も

「昨日は、クーデレつてたまらなー」

萌ポイントだつ!」つてゆつてたつけな? も

「夢羽もさあ、2次元にはまればいいのに も  
そしたうとあ、辛くないよ?」

「ん・・・。やだ も

「いのおーーー!」

いつもこんな感じで学校に向かっている。

今田は私の気分とは裏腹に澄んだ青色だった。

私は気分が乗らなかつた。

「おひはよーーー」

クラスのみんながぞくぞくと教室に入つてくる中

「夢羽、帰ろうかなあー も

「え? なんでも も

後ろの席の友姫が体を乗り出してきた。

「テンショントン上がんない^\_^；

「まじかあ・・・。たまにはいいんじやない? W」

へんわしゃあ帰る

先生にゆき?

「おうかご！」

こんなこと初めて。

もう少しで高一もおわり2年になら。

ブリーブリ

(結時)

ディスプレイに表示された。

暇だな W こいつ W

今日さあ、偉香と一緒に  
帰るんだろ？

ああ・・・

忘れてた w  
一緒に帰るんだつた w

プルル プルル  
「もつしもーし」  
元気に偉香がでた。

「今日さあ、テンション上がらないから  
帰るわあ w」

「まじかよ w そんな理由で帰れるの?」「  
だつて、先生にゆつてないもん w w w w  
「うわあー w w まあ、気をつけて帰りよ?」「  
おつけーへへ」

あ・・・  
誰だっけ・・・

結時か

メール返さないと・・・

ごめん・・・。

今日は今から帰るんだ。

また今度ね

ホームに座っているとふわふわと雪が  
振ってきた。

「・・・・・キレイ・・・・」

思わず声がでてしまった。

ピー

駅員さんの笛がなつて電車がホームへ入ってきた。

プシューっ

ドアが開いて暖かい空気が私をむかい入れてくれる。

ちょうど席が開いていたので座り、ポケットからウォームランを取りだし、耳にイヤホンをつけた。

流れ始めた曲は、龍の好きだった歌。

悲しくて切なくて・・・

でも、今でも変わらず好きな私。

私と龍との最後のつながりのようにおもえた。

龍・・・

今なにしてる?

仕事してる?」「飯食べてる?それともまだ寝てるかな?

何かあれば思い出してしまう・・・。

そんなことを考えていると・・・

どれくらい時間がだつたのだろう。

私の降りる駅の3つ手前のホームで電車が止まっていた。

「あのお・・・。」

知らない男の人が私の目の前にたつて  
なにか話しかけている。

イヤホンを耳からはずした。

「なんですか？」

「夢羽ちゃん・・・だよね？」

「え・・・・。」

知らない男は私の横に座った。

## 唐突

「俺だよ？」

「誰？」

「誰・・・」

何で私のことを知ってるの？

恐怖と不安でいっぱいだった。

「だーかーらー俺！」

「結時だつてw」

「・・・え？ 結時くんつ？？」

「そうだよーー！」

「ごめんへへ・知らなかつた」

私の勝手なイメージだけど  
すつごくチャラライイメージだった。

でも、意外にも黒髪の似合う  
どっちかって言つと優等生？タイプの人だった。

「なんかちがう・・・」

つい本音がでてしまったw

「あはははは w w」

「つてか、何でいるの？」

「ん?えっと・・・一緒に帰るって

約束したから?」

ああ・・・・。

やっぱ「イツ馬鹿だ・・・。

見た目だけかよ w

「学校は?」

「ん? 遅刻だつたからめんどくさくて行つてない w

電車には人がいなくて私たち2人の会話しか聞こえない。

「夢羽ちゃんはさ、彼氏いるの?」

「え・・・・つ。え・・・・つとお・・・・。

ん!。別れたばつかかな w ^ ^ .」

「あ・・・・。ごめん・・・。

でも・・・」

「でも?」

「よかつた^ ^」

「はあ?」

あつ・・・。

初対面の人には「はあ?」ってゆつちやつた・・・。  
でも、なんでいいわけ?  
意味がわからない。

あると、結時は立ち上がりて私に手を差し出した。

「俺、夢羽ちゃんのことが好きでした。  
付き合つてください…！」

・・・・・はあ?  
えつ・・・・なんで?  
好きでした?  
んー?=??

「前から私のこと知ってるの?」  
「うん・・・。」

私はずっと前から結時と出会っていた。

それは9年とかのぼつた6歳の夏でした。

夏の日

「俺が夢羽ちゃんのこと好きになつたのは  
9年前のことなんだ・・・。」

9年前の私は小学1年生でママと花火大会に行っていた。

「ママーー！-夢羽、浴衣きたあーいー！」

「うん！」

バーンツ

パチパチパチ・・・

花火が空に上がつては消えていく。。。

ふと気づけばママとはぐれていた。

「マサニラ」

私は花火に見とれていて迷子になってしまった。

「う・・・つ。」  
ふえーんつ

心細く知らない人たちの中怖かつたのか、泣いてしまった。

「大丈夫か？」

私の目の前に現れたのは、小さな男の子だった。

「う・・・つ。うん・・・。」

「どしたの？」

「ママがね・・・ママがいなくなつたの」「僕も一緒に探してあげるよ^\_^だからさ、泣かないで?」

「うん」

男の子は私の手をひっぱって歩き出した。

たどり着いたのは小さな神社で、階段に座つた。

「足が・・・。」

慣れてないゲタをはいた私の足からは血がでていた。

「大丈夫?」

「うん w 平氣」

男の子は私の顔を覗き込んで二口と笑つた。

「名前はなんてゆーの?」

「夢羽!あなたは?」

「僕は、結時」

「結時も迷子になつたの?」

「ううん。僕はもともと1人だった。」

「1人？ママは？パパは？」

「僕にはパパ、いないんだ・・・。」

「なんで？」

結時は何も答えずにニコニコと笑った。  
笑っているのに笑っていない・・・。

「じゃあさ、結時が1人になつたときは夢羽が一緒に  
いてあげるからね^\_^」

「え？」

「夢羽ね、結時に助けてもらつたでしょ？」

「う・・・うん」

「だから、今度は夢羽がね、助けるの^\_^」

「ありがと・・・。」

「夢ーーーーー！」

遠くからママの呼ぶ声がする。

「あーーーママだ！」

「じゃあ、僕はもお行くね

「うん^\_^ ありがとう。結時

「じゅつ。ぱいぱい^\_^」

「ぱーぱー

小さな手をめこつぱこ振つてやみなりした。

「あつ……思いだした！」

思わず声をあげてしまつた。

## 再会

「うとうつわけも思い出しててくれた？」

結婚の一言で我に返った。

「う、うん」

「俺さあ、あの時から好きなんだよねえ」

「はあ・・・。ううえつ？」

「なーんてね、夢羽ちゃん彼氏いるでしょ？」

「・・・。いたけど別れたよ？へへ・」

無言の車内・・・

空氣やえ重く感じた・・・

「ごめん・・・。」

「なんで謝るのよ、」

「いや・・・話したくなかったでしょ・・・」

「まあ・・・でも終つたからしょーがない、」

なんてゆつてるナビ、わざぱづ忘れたわけじゃない。

未練たらたらなのはイヤだ。

そんな自分はもつといやだ。

でも、ヽ、でもどうしようもなかつた。

誰かに頼るわけにもいかず・・・

「俺さあ、人信じられないんだよね。」

「うん」

「だから、俺じりじれの夢羽がす」「ことと思つ。」

「うん」

「だからさ、俺が言うの変だけど信じるの止めないでほしい」

「・・・うん」

そうだね。

信じるの止めちゃったらダメだね。

信じるのって難しいし、辛いし、よくわからないうことがたくさんあるけど

温かくて、嬉しくて、幸せなことなんだよね。。。

「うん！頑張る^ ^」

自分の気持ちには嘘をつかない。  
そんなキモチを再度確認できた。

「あ・・・。そろそろ降りなきや」

「だなー」

そういうて2人で電車をおりた。

## 切り替え

電車を降りると今日も駅は人であふれていた。

「のまま私が見えないよう隠してくれればいいのに・・・

「夢羽？」

名前を呼ばれてやつと我にかえった。

私たちは改札に向かつて歩き出す。

改札を抜けて急に結時が振り向いた。

「つで返事きました？」

「ん？」

「俺、前の彼氏がどんなやつかとか、どれだけ好きだったかは

分からんけど、夢羽が悲しい顔するのは見たくないな。

少しずつでもいいから、俺の事見てくれないかな^ ^ . . ?

「. . . . . スキになれるかわかないよ？」

「それでもいい」

「わかった」

「まあ、『バー』で飲みますか！」

そうこうして駅の近くにあるカフホにむかつた。

「結時は彼女いないの？」

「ん・・・へへ・彼女いるのに夢羽に告ぐつて最低じゃね？」

「わわわわうだね」

正直付合ひてる感じはしなかった。

でも、結時と話してると龍のことを考えずにはすんだ。

自分勝手だな・・・私。

喫茶店に入ろうとするときから見回りの警察がやつてきた。

「やばい」

「夢羽走れる？」

結時の声と同時に手をひっぱられた。

「無理かな足首悪いんだよね」

「一緒につかまるか？」

「ちよつとい――君たち」

「「はい・・・」

私たちは警察に連れられて歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5304q/>

---

REALITY

2011年10月8日16時09分発行